

魅力ある地方大学の在り方に関する主な意見（第 156 回大学分科会）

【地方大学を振興する意義】

- 産業界でも、データサイエンティストを採用するために、わざわざ企業の研究所を都会にもってきている。この職種の人たちは本来、東京で仕事をする必要はなく、ほとんどオンラインでできるが、そうした人材が地方にいないために、東京に研究所を置くということが生じている。地方の国立大学でこうしたことが学べ、そのまま地方で就職することができるという流れを作ってほしい。
- 新型コロナウイルス感染拡大を受けて、テレワークによってどんどん一極集中から地方分散の流れが起きている。東京の大学に入学するが、地元でそのまま勉強することができ、月に 1・2 回程度、東京や都市部の自分の大学に通学するというような教育体系ができないか。
- 地域の中の大学の学生収容力が原因で大学が貢献しようと思っても限界があった中で、国立大学の定員増を認めるという方針が出てきたのは非常に良いこと。

【地域の特色を生かすための仕組み】

- 魅力ある地方大学を実現していくために地域連携プラットフォームを形成していく上では、産官学金労言の多様な各主体が参画して議論が行われることが望ましい。
- みなと同じように地方に総合大学ということではなく、地域の個性や、産業界・自治体・大学の個性を出していくことが必要。そこに地方創生交付金をはじめとする財源措置を組み込んでいくことによって、大学を中心としたまちづくりをすることができる。

【定員増をする分野の考え方】

- STEAM と言っても単純ではなく、大学での教育と社会での要請との間のミスマッチが生じないように、この内容をもう少し明確にしてどういう人材を育成するのかということを示す必要がある。
- AI やデジタル化など、世界の動きを地域に持ち込む分野と、農業や地域ごとに重要な分野とがある。それらの 2 つの観点から強化をすることが重要ではないか。
- STEAM といってもその地域に必要な STEAM は何なのかという議論が必要。それぞれの地域が特性を発揮するために必要な分野があるはずであり、そういうものを一般的な大学に必要なものとして書くと、地方の大学の振興には結びつかないことに留意する必要がある。